

神戸郵船ビル

所在地 神戸市中央区
建物用途 事務所
竣工 1918年
改修 1993年
所有者 日本郵船(株)
設計者 (株)日本設計関西支社
施工者 (株)大林組
(株)藤木工務店



〈審査評〉 昨年の阪神・淡路大震災の罹災中心地である港町、「神戸メリケン波止場」埠頭のつけ根部分に建つ「神戸郵船ビル」は、1918（大正7）年5月「日本郵船神戸支店」として竣工した建物である。

今般の現地調査段階では、周囲には震災による被害建物や未修復高架道路が多々見受けられる中、完然として伝統様式に則った格調高い外観を誇り、内部の事務所機能についても何にも支障なく健在であった。

設計は曾根中条建築事務所の作品であったが、先の大戦により大被害を被り、その改修のため、1950～52年にかけて安井建築事務所の手により、被害調査と広範囲な改修・補修工事（特に屋根部分）が施され、一貫して事務所ビルとして使用されてきた。

その後、1977年及び88年の「建物躯体の健全度調査」及び「構造と設備の経年劣化度調査」により、事務所ビルとしてその機能を果たすには限界に近い状態であるから、敷地の再有効利用の検討を含めた再生計画検討と共に建物利用は閉鎖されたが、1993年神戸市のアーキテクチャーフェアを契機に事務所ビルとしての再生化が確立した。

改修内容は、70年余を経年した建物を現代のオフィスワークに適合する事務所ビルとして、躯体安全性の確保、室内執務環境を構成する内装・OAフロア・個別空調・ELV等による快適性・利便性の確保と防災設備性能の確保、また、生活環境改善のための増築部分の解体除却による外構駐車場の整備、更には最も腐心したという外観保全のための外壁・屋根の修復等建物の殆どについて再生工事が施されていた。

評価の第一点は、建物の経年劣化で使用に耐えられず建物閉鎖に追い込まれた際の、経済環境はバブル全盛期にあり、使い捨て感覚で古いものを壊しては建て替える風潮の中、本建物の歴史的・文化的価値を認識し時代の流れに流されず再生化の道を選んだ事業主の経営感覚である。

次に、建物の躯体構造の安全性確保は最もベーシックなものであるが、極めて地味なもので、商業ビルでは採択され難いにも係わらず、設計者の綿密な調査結果に基づく卓抜した構造補強計画、即ち基礎地中梁補強や柱・梁の鉄骨抱き合わせ補強、更には外壁レンガを保全しながらの補強コンクリート壁の採用の効果が改修直後の大震災によって証明されるとは誰が予想したであろうか。

また、外観保全のため、屋根はオリジナルのデザインを忠実に踏襲し、外壁レンガの浮きやひび割れをエポキシ樹脂加圧注入及びピンニングによる固定を図ったうえ、タイル欠陥部の処理に工夫が凝らされ、更にはサッシュの更新に際し、室内換気のための個別換気の外気取入口と排気口はサッシュと一体型のスリットを設ける等オリジナルの外壁意匠への配慮がなされている。

優れた建物が社会的資本を構成するという視点からは、対象建物の用途が、その敷地の再有効使用と合致しているか否か、或いは、年々変化していく周辺の街並みの環境変化に対応して、役割を担い続けているかが問われるところであるが、本建物の場合、竣工以来、数々の経済社会の激変と大戦の被害、更には大震災の被害にも係わらず、今後とも、貿易経済の流通業務の拠点としての機能を担った生きた建築として受賞するにふさわしいものである。